様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月　 ９ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０５３７

研究課題名（和文）状況に応じた欺きと道徳判断の発達に関する心理学的研究

研究課題名（英文）Psychological study about the development of deception and moral judgment depending upon situation

研究代表者
林　創（HAYASHI, Hajimu）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：８０４３７１７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，子どもを対象に，「状況に応じた欺きと道徳判断」に着目し，その発達過程を心の理論と関連づけながら，実証的方法で解き明かすことを目的とした。一連の研究の結果，欺きについては，児童期を通じて，二次の心の理論の発達とともに，状況に応じて人は選択的に感情を隠したり表出したりすることの理解が進むことが明らかになった。また，道徳判断に関連する面については，心の理論の発達とともに，人は相手の謝罪を客観的に受け入れ，怒りがおさまるということを理解する傾向も明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to clarify the development of deception and moral judgment depending upon situation. The results revealed that children begin to understand that people selectively conceal or express emotion depending upon context after 8 to 9 years. This ability was related to second-order theory of mind. Furthermore, the results revealed that children begin to understand that people's anger settle when the opponents apologize. This understanding was also related to theory of mind.

研究分野：認知発達心理学

キーワード：認知発達　欺き

１．研究開始当初の背景

人は誰でも，他者を欺くことがある。優れた人格者であっても，時には自分を守るために，うそ（ことばを使った欺き）をつかざるを得ないことがある。逆に，他者に欺かれたままでは不利益を被るため，他者の行為の善悪を適切に考える道徳判断も大切である。

ピアジェの道徳判断の先駆的研究以降，欺きや道徳判断が幼児期に大きく発達することが明らかになった。しかしながら，欺きやうそは他者を騙す悪質なものだけではない。たとえば，子どもは嬉しくないプレゼントをもらっても，しだいに本心を隠して笑顔ができるようになる。これは「他者を傷つけないための欺き」といえる。すなわち，欺きにはさまざまなレベルがあり，一様に悪いと考えるのではなく道徳判断も柔軟にする必要がある。言い換えれば，状況に応じて適切に欺き，適切に道徳判断ができるようになることが，子どもの発達にとって重要である。

このように，他者を欺くことと，欺いた他者の行為を適切に考える道徳判断は「裏表の関係」にあり，これらが状況に応じて協調して働くことが求められる。ところが，その両者の関係を正面から扱った研究はあまり見られないのが実情であった。

２．研究の目的

本研究では，心の理論の発達が，状況に応じた欺きや道徳判断を促すことを，子どもを対象にした実証的研究で明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

第 1 に，状況に応じた欺きについては，児童期の子どもを対象に，「表出ルール」の理解の発達を検討した。前述のように，うそには他者を気遣う向社会的なものもあり，落胆や悲しみの表情を出さずに笑顔で応対すべき場合がある。このように相手の感情を傷つけないように社会的慣習に従って表情を示すことを表出ルールと呼ぶ。しかしながら，本当の感情を偽ることが常に有益というわけではない。たとえば，他者が余計なことばかりをして，迷惑をかけられている場合，相手に相手自身の行動が無神経であることに気づいてもらうために，あえて本当の感情を表出する場合もある。このように，人は状況に応じて選択的に感情を隠したり表出したりするが，そのことを子どもが何歳頃から理解しているのかを，小学 1 年生，3 年生，5 年生，そして大人を対象に検討した。

具体的には，主人公が相手から余計なことをされて，本心ではネガティブな感情を抱いているときに，どのような感情を伴う発話するかを選択してもらった。この際，「相手に嫌な思いをさせたくない」という向社会的条件に加えて，「相手は自分でしないと気が済まない人なので，みんながうんざりしている」という本心を伝達したくなる条件を設定し，検討した。また，二次の心の理論にかかわる質問や二次の誤信念課題を合わせて用意した。向社会的な状況では，「主人公は相手に自分の本心を『知って』ほしくない」状況であるのに対して，本心を伝達したい状況では、「主人公は相手に自分の本心を『知って』ほしい」状況のため，二次の心の理論との関連が予想された。

第 2 に，状況に応じた道徳判断については，心の理論の発達をふまえた謝罪の認識の発達を検討した。「謝罪」は，相手に嫌な思いをさせてしまったときに関係を修復する大切な行動とされる。相手の加害場面で謝罪があったかどうかにより，怒りなどの感情がどのように変化するかといった点を検討することは，行為の善悪を考える道徳判断の発達

を考えるうえで重要である。そこで，児童期の子どもを対象に，主人公が相手から嫌なことをされるお話を複数用意した。この際，主人公と相手の親密性が高い条件と低い条件，および相手の謝罪がある条件とない条件を設定した。そのうえで，主人公の怒りがどの程度，低減するかを判断してもらった。

４．研究成果

第 1 に，状況に応じた欺きについて，大人では向社会的条件ではポジティブな発話を，本心を伝達したくなる条件ではネガティブな発話を選ぶ傾向が見られた。1 年生はどちらの条件でもネガティブな発話を選んだ。向社会的条件では，ネガティブな発話を選ぶ割合は 1 年生から大人に向けて減少したが，本心を伝達したくなる条件では U 字型を描き，1 年生から 3 年生にかけて減少し，5 年生から大人にかけて増大した。また，二次の心の理論にかかわる質問や二次の誤信念課題の成績とも関連があった。このことから，6〜7 歳頃までは，見かけと本当の感情の区別をするのが難しく，人は状況に関係なく本心を示すと考えている傾向が明らかになった。しかし，二次の心の理論の発達とともに，8〜9 歳頃から，人は状況に応じて選択的に感情を隠したり表出したりすることを理解し始め，児童期後期にこうした理解が明確になることが明らかになった。

第 2 に，状況に応じた道徳判断について，相手から嫌なことをされた場面において，相手の謝罪の有無は，主人公の怒りの変化に強く影響するものの，両者の親密性はあまり影響しないことが明らかになった。また，そこには，心の理論の成績との関連も見られ，心の理論の発達とともに，人は相手の謝罪を客観的に受け入れ，怒りがおさまることを理解するようになる傾向も明らかになった。

以上の研究より，幼児期に心の理論の基礎が成立するが，児童期に心の理論がさらに洗練されて，単に欺いたり，道徳判断ができるようになるだけでなく，状況に応じて欺いたり本心を示したり，あるいは状況に応じて道徳判断も変化させる様子が明確になった。今後の展望として，対象年齢を広げ，大人の欺きや道徳判断に近づく様子を検討することで，さらに人間らしい状況に応じた社会性の本質に迫ることができるといえよう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① Hayashi, H. (in press). Omission bias and perceived intention in children and adults. *British Journal of Developmental Psychology*. （査読有り）DOI:10.1111/bjdp.12082

② Hayashi, H., & Shiomi, Y. (2015). Do children understand that people selectively conceal or express emotion? International Journal of Behavioral Development, 39, 1-8. （査読有り）
DOI: 10.1177/0165025414548777

③ 林 創 (2014). 児童期および青年期の発達研究の動向 教育心理学年報, 53, 14-24. （査読有り）

④ 林 創 (2013). 児童期の「心の理論」－大人へとつながる時期の教育的視点をふまえて 発達, 135, 23-29. （査読なし）

⑤ 郷式 徹・林 創 (2012). 心の理論　児童心理学の進歩, 51, 51-81. （査読有り）

〔学会発表〕（計 7 件）

① 林 創・潮海侑紀 (2014). 感情の表出と偽装の使い分けに関する子どもの理解, 日本心理学会第 78 回大会，2014.9.12，同志社大学（京都府）

② 林 創・米谷 嶺 (2013). 児童期の子どものうその理解，日本心理学会第 77 回大会，2013.9.20，北海道医療大学（北海道）

③ Hayashi, H. (2013). Children's understanding of display rules related to second-order mental states. 16th European Conference on Developmental Psychology, 2013.9.5, Lausanne (Switzerland).

④ 林 創・村田歩美 (2013). 幼児のルール違反に対する理解　日本教育心理学会第 55 回総会，2013.8.19，法政大学（東京都）

⑤ Hayashi, H. (2013). Children's understanding of lying related to intention. 35th Annual Conference of Cognitive Science Society, 2013.8.2, Berlin (Germany)

⑥ 林 創・谷松隼人 (2013). 意思決定における魅力効果の発達　日本発達心理学会第 24 回，2013.3.15，明治学院大学（東京都）

⑦ Hayashi, H. (2012). Does omission bias relate with the difference of perceived intention? Poster presented at the ICT (International Conference on Thinking) 2012, 2012.7.4, London (United Kingdom)

〔図書〕（計 7 件）

① 林 創 他，ナカニシヤ出版，心のしくみを考える—認知心理学研究の深化と広がり—，2015，168 (83-94)

② 林 創 他，新曜社，ワードマップ 批判的思考—21 世紀を生きぬくリテラシーの基盤，2015, 320 (52-59, 164-167)

③ 林 創 他，北大路書房，R による心理学研究法入門，2015，268 (13-34)

④ 林 創 他，有斐閣，問いからはじめる発達心理学—生涯にわたる育ちの科学—，2014，217 (42-53, 98,123)

⑤ 林 創 他, 誠信書房, 誠信 心理学辞典 [新版]，2014，1088 (554-557)

⑥ 林 創 他，ナカニシヤ出版，嘘の心理学，2013，148 (83-93)

⑦ 林 創 他，北大路書房，0 歳～12 歳児の発達と学び―保幼小の連携と接続に向けて―，2013, 206 (13-23).

〔その他〕

とくになし

６．研究組織

(1)研究代表者

林　創（HAYASHI, Hajimu）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：80437178